

大成聖安尼の孤独 ―近世比丘尼御所における漢詩の研究―

堀川 暢子

本発表では、大成聖安(1668-1712)という尼の詠んだ漢詩を分析する。聖安尼は後西天皇(1637-1685)の娘として生まれたが、尼となり、京都にある曇華院という尼寺に暮らした。近世初期には未婚の皇女を尼寺に送ることは通例のように行われていた。一般に、彼女らは大変若い時に尼寺へ送られ、そこで一生を過ごしたのである。皇女が入寺する尼寺は特別に定められており、それらは比丘尼御所と呼ばれた。比丘尼御所に生きた皇女たちは、古典中国語で書かれた仏教の経典を読み解く等の高い教育を受けており、仏教的価値観と宮廷の世俗的価値観を併せ持つ特殊な文化を形成したのである。しかし、彼女らがどのように尼寺での文化や生活を経験したのかはよく知られていない。彼女らの遺した詩を読み解くことは、これらの点を究明する手だての一つである。

聖安尼は特に漢詩を詠むことに優れ、多くの漢詩を遺したが、彼女の漢詩には強い孤独の気持ちが漂っている。これは、歴史的資料に記された、尼寺の長として輝かしい業績を持つ彼女の姿からは、容易には読み取れない事柄である。この点において、聖安尼の漢詩は、彼女の気持ちや内省を見出す上で貴重な資料である。聖安尼の漢詩に用いられた孤独の表現を検討することで、彼女の置かれた階級、ジェンダー、宗教的文脈からその孤独が説明できるのではないかと考えられる。この研究を通して、尼となった皇女の私的な側面に焦点を当て、近世比丘尼御所における皇女らの生活の知られざる一面を解明することを目指している。

The Loneliness of Abbess Taisei Seian : A Study of Chinese Poetry Created at “Nuns’ Palaces” in Early Modern Japan

Horikawa Nobuko

In my presentation, I analyze the collection of Chinese poems written by a Japanese Buddhist nun, Abbess Taisei Seian 大成聖安 (1668-1712). She was born a daughter of Emperor Gosai 後西天皇 (1637-1685) but became a Buddhist nun and lived at the Donke'in 曇華院 convent in Kyoto. It was a common practice in early modern Japan (ca. 1600-1868) to put unmarried royal princesses into Buddhist convents. They were generally sent to a convent at a very young age and spent the rest of their lives there. These special convents that were designated for royal princesses were called “nuns’ palaces” (*bikuni gosho* 比丘尼御所). Princess-nuns who lived at nuns’ palaces were schooled in classical Chinese Buddhist scriptures and created a unique culture that combined Buddhist values with the secular values of the court. However, we do not know much about how they experienced the culture and life at such convents. We can examine their poems to investigate these points.

Abbess Seian was particularly skilled at composing Chinese poems, many of which survive today. She communicates a strong sense of loneliness in her poems, one not readily traceable in historical documents which describe her as a well-respected princess-nun. In this regard, Abbess Seian’s poems are invaluable because they give us a window into her feelings and reflections about her life. I examine the expressions of loneliness in Abbess Seian’s Chinese poems and argue that her solitude can be explained from her position on axes of class, gender, and religion. Through this, I hope to shed light on unknown aspects of the princess-nuns’ lives at nuns’ palaces in the early modern era.

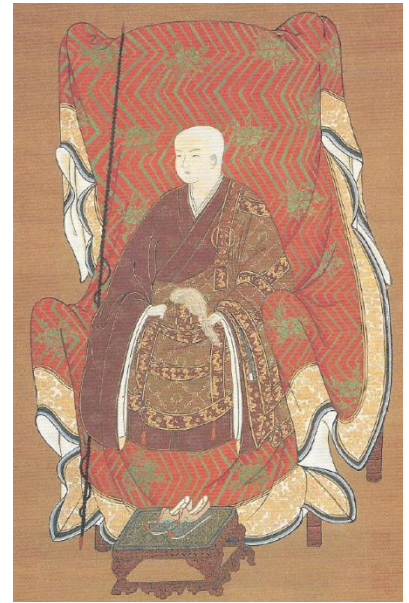
1. 大成聖安尼 (1668-1712) について

- 後西天皇 (1637-1685) の娘。
- 3 歳で曇華院 (比丘尼御所の一つ) に入寺。
- 11 歳で得度し第 24 世門主となる。
- 東山天皇 (1675-1710) より紫衣の拝領。
- 曇華院の「中興」と呼ばれる。
- 漢詩に優れた。

(Fister, Patricia. *Art by Buddhist Nuns: Treasures from the Imperial Convents of Japan*. New York: Institute for Medieval Japanese Studies, 2003, p.29)

→ 「大成聖安尼像」

(絹本着色一幅, 江戸時代 (18c), 曇華院蔵)
(Institute for Medieval Japanese Studies, et al. eds. *A Hidden Heritage: Treasures of the Japanese Imperial Convents*. Tōkyō : the Sankei Shimbun, 2009.p. 80.)



2. 聖安尼の漢詩

- 『中興通玄大成聖安和尚語録』
 - 聖安尼の言葉、著述、業績などの記録
 - 公的漢詩 64 首 (偈頌 40 首 + 追悼の漢詩 20 首 + その他の漢詩 4 首)
- 『中興通玄大成和尚曇華集』
 - 書簡
 - 私的漢詩 212 首

(横山恵理 「[翻刻]曇華院蔵『曇華集』」 大阪工業大学紀要 61:1 (2016), 66-78.)

3. 孤独の表現

(a) 「孤」の多用

「孤」＝みなしご、ひとり、ひとつ→ひとりぼっち、よるべない、群れを離れた、さびしい、等。(諸橋轍次,『大漢和辞典』vol.3, 東京:大修館書店, 1955-2000, pp.850-858)

「孤」の現れる回数

	孤
『語録』 (公的漢詩 64 首)	0
『曇華集』 (私的漢詩 212 首)	32

「孤」の使われ方

1. 孤 + 家や部屋の中の物 19/32
孤窓 (7), 孤床 (3), 孤枕 (3), 孤榻 (3), 孤牀 (2), 孤牖 (1)
2. 孤 + 状態や行動の述語 4/32
孤吟 (1), 孤坐 (1), 孤望 (1), 万里栄思孤耿耿 (1)
3. 孤 + 外的景物 9/32
孤月 (2), 孤山 (1), 孤竹 (1), 孤鶯 (1), 孤影 (1), 孤螢 (1), 孤客 (1), 孤舟 (1)

詩1「杜鵑」

夢覚孤床静

杜鵑帶雨飛

一声来近枕

何者不沾衣



©森上義孝

『日本大百科全書: ニッポニカ』東京: 小学館, 1994

杜鵑 (ホトトギス)

- 田植えの頃にくる渡り鳥 (季語: 夏)
- 中国故事に基づき、死者の靈魂との結び付き、離別、物思い、懐旧などを意味する。

(小島瓊禮, 小町谷照彦, 他. 「ホトトギス」『日本大百科全書: ニッポニカ』東京: 小学館, 1994)

(b) 窓・簾の多用

窓や簾の現れる回数

	窓	櫳	牖	簾
『語録』 (公的漢詩 64 首)	1	0	0	0
『曇華集』 (私的漢詩 212 首)	51	4	3	13

詩 2 「秋夜偶成」

長天浮爽氣

月色興無窮

群犬吠山徑

百蟲啼野風

悲秋秋夜永

感古古今同

自是孤窓下

凄然万慮空

簾 →
(デジタル大辞泉 第二版, 東京:
小学館, 2012.)



櫳・牖 →
("Renjimado," Japanese
Architecture and Art Net Users
System (JAANUS):
<http://www.aisf.or.jp/~jaanus/>)



詩歌における「窓」

「建物における窓の機能を端的に定義するならば、それは建物内部に作られた空間と、外界すなわち自然・社会との間に存在する透視的な境界である。[...] 詩歌の中で「窓」表現が使用される際には、これに加えて、窓それ自体に対する描寫（建物外觀の装飾）や窓によって隔てられた（室内・室外の）光景の描寫、更に自己と他者の間に存在する距離の暗示などの用法が確認される。」

(石碩 「謝朓詩における「窓」の風景—遠景描寫の一手法—」 中國文學研究 36 (2010), p. 28)

(c)「為誰」の使い方

「為誰」の現れる回数

	為誰
『語録』 (公的漢詩 64 首)	1
『曇華集』 (私的漢詩 212 首)	6

「為誰」の使われ方

『語録』(1)
金棺不識**為誰**開 (「佛涅槃戌寅」)

『曇華集』(6)
為誰今夜照書檣 (「蛩」)
為誰砧杵急 (「又 (秋夜)」)
為誰嬌厭露芳心 (「春日閑坐」)
為誰欲霽**為誰**陰 (「中秋」)
為誰青女弄新紅 (「楓樹」)

詩3「又 (秋夜)」

秋夜増涼氣
 荒園草露清
 金風雲万里
 銀漢月三更
 移箔樹木影
 近床蟋蟀声
為誰砧杵急
 枕上夢難成



『伊勢新名所歌合絵巻』
 『日本国語大辞典第二版』
 東京：小学館，2000-2002.

砧

- 槌で布を打って柔らかくし、つやを出すために用いる木、または石の台。
(季語：秋)
- 世阿彌作謡曲。訴訟のため都にある夫を留守の妻が慕うあまり砧を打って心を慰めるが、恋慕の情は増すばかりで、遂に恋い死ぬという筋。
(「砧」『日本国語大辞典第二版』東京：小学館，2000-2002.)